

令和3年度秋田県放課後児童支援員等資質向上研修 研修レポート抜粋

(誤字脱字等については校正しているため、原文と異なる場合があります。)

県央会場

科目 ①障害児の支援

- ◆ ほめるとは、子どもにあなたの行動に気付いていることを知らせる言動と学び、普段の学童生活で「〇〇できたよ！〇〇したよ！」という声は、聞いてほしい、見てほしいという子どもからのサインではないかと感じた。ほめ方は一つではなく、ジェスチャーや表情等、多くの方法を使い「私は気付いている」ということを伝えてあげたい。本学童でも、配慮が必要な児童がいる。一つ一つの行動や反発にも意味があることを理解し、その子にとって安心できる準備や伝え方について様々な方法を試してみたいと思う。見通しが持てるような視覚的支援の重要性も再度認識できた。子どもたちにとって安心して楽しく過ごせる空間となるよう今まで以上に向き合い、肯定的な言葉がけに努めたい。
- ◆ すぐに手足が出てトラブルを起こす子どもへの対応が悩ましい。特に長期休暇は全体が浮つき怪我や喧嘩が多発。事情を聴く際、外やが騒ぎ立てさらに興奮するケースが多く、隔離するのにテント等の使用を取り入れたいと思う。叱られることが多く、ほめられ体験が少ないので、支援員が考えの幅を広げ、ネガティブをポジティブに変換し、子どもに自信や喜びを与えられるよう努力する必要があると感じた。
- ◆ 現在、勤務している児童クラブにも発達障害と診断された子どもが数名在籍しています。日々対応に苦勞し、どうしたらより良くすごせるかを考えています。今回の研修では、今まで自分がしてきたほめることや活動の見通し等は今後も継続していこうと思った反面、ルール確立、スタッフの共通理解等が不足していることも分かりました。障害の有無に関わらず、放課後の時間の充実のため、今後も努力していこうと思います。
- ◆ 一口に障害といっても、目に見えて分かる障害もあれば、分からない障害もあり、その子に合った対応が必要で、そのためには「この子はどういう子なのか」を観察し、その特性を理解することが必要だと分かった。障害を持つ子どもたちを多数派の理論から見ってしまう傾向にあるが、子どもを否定するのではなく、良いところをほめ、子どもたちが自分自身の長所を伸ばし活かせるよう支援していきたいと思った。
- ◆ これまで何度も障害児に関する研修を受け、参考事例に当てはまる児童に対して対応を変えてみたり、しかし、何も変化がなかったりと模索していたが、「自分の特性をまだ理解していないんだな」という見方もあるということを知り、冒頭からハッとさせられました。児童に対して支援員それぞれの見方があるが、密に情報を共有し、クラブとして共通の意識を持って対応できるようにしていきたいです。